

第4回クラシックを楽しむ会

2013年10月27日(日) 18:30~21:30

タイトル：歌劇「カルメン」(ビゼー)

会場等：オランジュ音楽祭(2004年8月3日)
フランス、オランジュ古代劇場

楽団等：フランス放送フィルハーモニー管弦楽団、
ニース歌劇場合唱団、ツーロン歌劇場合唱団
アヴィニョン歌劇場合唱団、同バレエ団、オランジュ
音楽祭合唱団、ブーシュ・デュ・ローヌ少年少女聖歌隊

指揮：チョン・ミョンフン(2000年から上記管弦楽団音楽監督)

演出：ジェローム・サヴァリ

出演：カルメン：ベアトリス・ウリア・モンゾン
ホセ：ロベルト・アラニーヤ
ミカエラ：ノラ・アンセレン
エスカミーリョ：リュドヴィク・デジエ



歌劇「カルメン」あらすじ

舞台は1820年頃スペインのセビリア。たばこ工場の女工カルメンが伍長のホセを誘惑して悪の道に引きずり込み最後には悲劇の結末を迎える物語。自由奔放なカルメンは自分の性格を変えず強い意思を貫き通す。純情で真面目な田舎者のホセは優柔不断。カルメンを一途に愛し誘惑にまけ身を持ち崩す。心移りしたカルメンはホセを強い意志で拒絶し刺される。

みどころ聴きどころ

カルメンの歌うハバネラ「恋は野の花」、セギディーリア「セビリアの城壁の近くに」、ジプシーの歌「賑やかな楽の調べ」。エスカミーリョの歌う闘牛士の歌「諸君の乾杯を喜んで受けよう」。ホセの歌う花の歌「お前が投げたこの花は」。ミカエラの歌うアリア「何も恐れるものはない」など新鮮で魅力的な歌。また、前奏曲、第2幕への間奏曲「アルカラの竜騎兵」、第3幕への牧歌的な「間奏曲」、第4幕への間奏曲「アラゴネーズ」はカルメン組曲中の曲としても有名。

オランジュ音楽祭とその舞台

オランジュ音楽祭はフランス南部プロヴァンス地方のオランジュ(英語：オレンジ)で毎年8月に開かれるオペラ音楽祭。会場は世界遺産の古代ローマ劇場で、幅103mの舞台、背後に巨石を積み上げた高さ36mの壮大な石壁が現存(写真の舞台上部の屋根は2006年設置)。観客席は9,000人収容可能。なお、オランジュの近くにはアヴィニョン、アルルなど古代ローマ遺跡が多い。



第5回クラシックを楽しむ会(予告)

タイトル：バレエ「白鳥の湖」(チャイコフスキー)

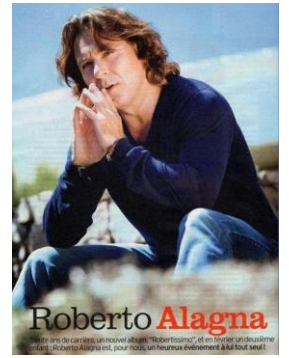
11月17日(日) 18時開場、18時30分上映開始

マリインスキー劇場管弦楽団、同バレエ団、指揮：ワレリー・ゲルギエフ

12月以降「魔笛」(モーツァルト)、ニューイヤー・コンサート2014・・・お楽しみに

ホセ役ロベルト・アラニーヤ

フランスの国民的テノール歌手ロベルト・アラニーヤは1963年生まれのイタリア系フランス人。音楽の専門教育は受けてなくパリの観光客向けナイトクラブで歌っていた頃オペラ歌手を志す。パバロッチェ声楽コンクールで優勝して一躍有名になり現在世界最高のテノール歌手の一人。美しいフランス語、太陽の声と称される明るく輝く声、抒情的で心のこもった表現力でフランスオペラには欠かせない存在。ウリア・モンゾンとの共演は今年25年目。※第1回目上映の椿姫のアンジェラ・ゲオルギウと今年5月に離婚。



歌劇「カルメン」誕生の経緯

ジョルジュ・ビゼーは劇音楽に才能を発揮し組曲「アルルの女」が好評だった1872年、パリのオペラ・コミック座から歌劇の作曲を依頼された。ビゼーはメリメの短編小説「カルメン」を題材に選り妻の従兄リュドヴィック・アレヴィとアンリ・メイヤックに台本を依頼するとともに作曲を開始。しかし題材は公序良俗に反するもの。劇場側は健全な社交場に相応しくなく台本の改変を迫る。紆余曲折を経て完成した作品は原作をより普遍的にし、1975年3月の初演は成功を予感させる。初演の3か月後ビゼーは36歳の若さで急死。しかしその半年後にウィーンで大成功を収める。素晴らしい音楽とともに不滅の名作となる。

ジョルジュ・ビゼー

ジョルジュ・ビゼー（1838年－1875年）は9歳からパリ音楽院に学び、19歳でローマ賞※を受賞して歌劇に意欲を燃やしたが生前はあまり認められなかった。ピアノの才能はリストを驚嘆・称賛させた。死後「カルメン」の輝かしい成功の結果、歌劇「真珠採り」などが再評価され、未発表だった交響曲ハ長調も広く親しまれている。※フランス国家の奨学金付留学制度。



プロスペル・メリメと小説「カルメン」

プロスペル・メリメ（1803年－1870年）は、フランスの作家、歴史家、考古学者、官吏。パリのブルジョワ出で法学を修めて弁護士・官吏になり、フランスの歴史記念物監督官として、オランジュ古代劇場を含む多くの歴史的建造物を修復・保護。ナポレオン3世の側近、元老院議員として出世。

小説「カルメン」は、1830年27歳で最初のスペイン旅行中の見聞、旅行中に知り合って「手厚い歓待」を受けたティーバ伯爵夫人（後のモンティホ伯爵夫人）から聞いた話などが材料。なお、彼女の次女ウジェニーは第2帝政の皇帝ナポレオン3世の妃になったが、メリメと共に伯爵夫人と「交流」のあったアレクサンドル・デュマ・フィス等がバックアップした。



「カルメン」の花

歌劇のカルメンは口の端にくわえた赤いバラの花をホセに投げつける。原作はバラではなくカシー（アカシア※1）の花。ミモザ※2に似た強い香りの小さな丸い黄色の花。メリメがなぜこの花を用いたのかは永井典克の「メリメ作品中の花」が詳しい。原作執筆当時バラはまだ一般的ではなく品種改良を重ねて大衆化したのは20世紀初頭。情熱的なカルメンと赤いバラのイメージが結びついたのは「カルメン」が次つぎに映画化され普及した影響らしい。

※1. 白蝶形花のニセアカシアをアカシアと呼ぶことがあるが全くの別物。

※2. ミモザの原義はオジキソウ属。アカシア属のフサアカシア等を一般にミモザと呼ぶ。

